

『人文学報』 第 93 号 抜刷
(京都大学人文科学研究所 2006 年 3 月)

商品世界からこぼれ出る家畜

—— 社会主義および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味 ——

風 戸 真 理

商品世界からこぼれ出る家畜

—— 社会主義および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性性と意味 ——

風 戸 真 理*

目 次

1. はじめに —— 家畜の個性性と牧畜社会の近代化
2. モンゴルの牧畜をめぐる自然環境と政策史
 - 2-1. 自然環境
 - 2-2. 牧畜政策の変遷
 - 2-3. デレン郡での調査概要
3. ネグデル期の家畜管理
 - 3-1. 家畜の所有関係と牧民の立場
 - 3-2. 共有家畜の管理方法
 - 3-3. 私有家畜の管理方法
 - 3-4. ネグデル期における家畜の管理と意味づけ
4. 市場経済化期の家畜管理
 - 4-1. 経済手段としての私有家畜
 - 4-2. 貯蓄財としての家畜の脆弱さ
 - 4-3. 家畜に対する個体識別
 - 4-4. 家畜の個性性の発現
5. 考 察
 - 5-1. 家畜の個性性が立ち現れるしくみ
 - 5-2. 個性性を認識することの意味
 - 5-3. 家畜の意味づけからみた近代の受容のしかた
6. おわりに —— 国家の政治経済の変化と家畜の意味

1. はじめに —— 家畜の個性性と牧畜社会の近代化

本論は、家畜の個性性に対する見方に着目して、モンゴル牧畜社会の変化を国家の政治経済システムの変化との関係で議論することを目的とする。このような問題意識をもつに至った背景として、次に述べるようなモンゴルの国家体制の変化と、牧畜社会の状況がある。1990 年

* かざと まり 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 kazato@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp

代初頭以降のモンゴル国¹⁾（以下、モンゴルとよぶ）は社会主義から市場経済化への急激な移行の過程にある。モンゴルの牧畜地域では、ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダなどの家畜が飼育されている。家畜と畜産物は牧民にとって、食料・交通手段・暖房・現金獲得や物々交換の手段など多様な用途に利用できる、彼らの生活を支える主要な資源である。現在モンゴル経済の中心的な領域では、家畜は、生産・消費・交換財として利用され、商品化されている。ところが、筆者の調査からは、古い家系に属するという理由で特別に扱われたり、かわいがられて名付けられ、食用されずに天寿を全うした家畜がいたことがわかった。つまり移行期のモンゴル社会において家畜には、商品価値だけでなく、それには還元できない特別な意味が付与されることがあるのである。

本論では、牧畜社会の中でも社会主義を経験し、また現在は市場経済への移行過程にあるモンゴルにおいて、牧畜民が変化する社会のなかで家畜をどのように扱ってきたのかを検討する。とくに家畜の個性性に焦点を当て、モンゴルの牧民が家畜の個性性をどのように認知してきたのか、家畜の個性性の認知は彼らにとってどういう意味があるのか、彼らは家畜の個性性にどのように対応してきたのか、を分析する。このことをとおして、モンゴルの人々が国家の政治経済システムに対応しながら、家畜に対してどのような経済的な価値や文化的な意味を付与してきたのかを議論する。

本研究に関連する先行研究を、牧畜社会のプロトタイプ論、個性性論、牧畜社会の近代化論、と分けて検討する。

まず、牧畜社会に関する初期の人類学的研究は、家畜が供犠獣・婚資・賠償などとして宗教・経済・社会のあらゆる面で重要な役割を果たすような、牧畜社会固有の論理の体系を示してきた〔福井 1987〕。これはいわばプロト牧畜文化とよべるものであり、その代表例はウシ文化複合（East African Cattle Complex）〔Herskovits 1926〕である。そこでは家畜には個性性が強く認められ〔太田 1987a, 1987b; 福井 1991〕、それゆえ家畜の移譲はその場限りの商品交換とは異なり、人々の間に社会関係を創りだし維持・強化する役割を果たしていることが指摘されてきた〔佐藤 1991〕。

つぎに、牧畜民が家畜の個性性をいかに認識しているかについての先行研究は、分類と個性識別という2つの側面からなされてきた。

分類の側面から家畜の個性性を捉えた研究として、たとえば梅棹忠夫は、内モンゴルでの調査に基づいて家畜を指示する様々な語彙の意味論的分析を行った。そして家畜個体を指示する語彙を、毛色などの身体特徴や行動特徴を表す原則として「一生持続する」「個別の特徴に関するもの」と、性や成長段階といった生物学的な「状態」を類別的に表現した「一般的類別に関するもの」とに大別した〔梅棹 1990: 521-522〕。梅棹による、語彙分析を通じた個性性の把握は、全体として分類的である。また太田至は、北ケニアの牧畜民トゥルカナの調査に基づ

いて、家畜の分類範疇を次のように2分した〔太田 1987a〕。(1) 弁別特徴が恣意的で、対象と人間との相互的な関わりのうちに形成されるような分類；身体特徴・行動特徴・所有関係など人間との関係によるもの、が含まれる。(2) 家畜種や性別の相違といった所与の不連続性に依存する分類；このような分類は、家畜に対する具体的な働きかけを行うのに不可欠な認知的前提をなすという点で技術的必要に支えられており、牧畜諸社会において普遍的に認められる。

一方で、分類とは異なる個体識別という認知が牧畜民のあいだに広く見られることが指摘されている。太田によれば、「人びとが家畜個体を同定して記憶するときには、家畜個体もっている様々な属性を組み合わせること、つまり分類を積み重ねるという方法をとっているわけではな」く、私たちが人間を区別できるように家畜も個々に異なることが牧畜民には「見ればわかる」というのである〔太田 2002: 26〕。つまり個体識別とは、任意の一個体をすべての他個体とは異なるものとして認知するということである。

家畜だけでなくモノ一般についても、「類」あるいは「一般性」に所属するような個性である「特殊性」(particularity)と、けっして語ったり指示したりできない、すなわち記述や指示に還元できない個体認識である「単独性」(singularity)を区別する議論がなされてきた〔柄谷 2001 (1994): 11, 出口 1995²⁾〕。家畜に対する個体識別という認知は、「見ればわかる」としかいいようのない個体の単独性に関わる認知なのである。だが、分類と特殊性／個体識別と単独性、という2つの領域は分断されたものではない。

イーグル・コピトフは、モノの属性や意味は、社会的相互行為が積み重ねられる時間的経過のなかで変化していくという見方を提示した。彼はモノの世界を分節する基準として等価性の概念に注目し、すべてのモノが単一的な交換領域において等価交換が可能である完全な商品化(commoditization)³⁾ 状況と、すべてのモノが差異化されていて交換がまったく不可能である完全な単独化(singularization)状況という理念的な2つの極を想定した。そして現実の社会や個々のモノは、実際には連続しているこの両極のあいだのどこかに位置づけられると論じた⁴⁾〔Kopytoff 1986: 69–70〕。

家畜は、類として扱われ集合の中に位置づけられることが多い一方で、他の個体から区別され、相対化できない単独性を認められることがある。家畜は一生を通じてその身体が時間の経過と共に変化し、また時には世代を越えて人間とのあいだに相互交渉を積み重ねていく。それゆえに、コピトフの言葉を借りれば、商品化と単独化のあいだを揺れ動く。

本論ではコピトフの方法論にならって通時的な視点を導入して、社会主義だった時期から市場経済化への移行期を通しての家畜と人々の関係を分析する。そして、生き物としての家畜の可塑性や人間との相互交渉の過程を動態的に把握することにより、国家の政治経済の変化のもとでの人間と家畜の関係を照射することを目指す。

最後に、牧畜社会と近代化との関係、すなわち近代化が牧畜社会に与えた影響や、個別の牧畜社会が近代をどのように受容してきたのかについての議論がある〔太田 1998; Sneath 2002〕。このような牧畜社会の近代化論の背景には、異文化をあたかも外部世界に対して閉じた「未開」社会のように表象することへの批判が人類学内部から出てきたことや、現実にも近代国家の枠組みが優先する世界における周辺小社会は外部との交流によって加速的に変容してきたことから、牧畜社会研究も、現代的な変化に着目するようになったという経緯がある。とりわけ、貨幣経済の浸透と市場経済化の中で、牧畜民が家畜を等価交換が可能な商品として扱ったり、ときには貨幣のように匿名的なものとして扱ったりするという側面が注目されてきた〔太田 2002; 湖中 2002〕。

ただし一口に牧畜社会といっても、社会形態が異なれば、家畜管理の技術や家畜に対する意味づけなどあらゆる側面で人間と家畜との関係は異なるだろう。また、現代の牧畜社会は近代国家に包摂されていることから、国家の政策とその変化に強い影響を受けている。近代化の受容のしかたが文化固有であるように、現代的な変化のもとで家畜の個性に対するまなざしがどのように揺らぐかも文化により異なるだろう。

以上の先行研究の検討から明らかな問題点は以下の3点である。家畜の個性が立ち現れるしくみ、個性性を認識することの意味、家畜の意味づけからみた近代の受容のしかた、である。この3点について本論で考察したい。章立てとしては、2章で調査地の自然環境と牧畜政策史をおさえ、3章では、社会主義政策のもとで牧畜の本格的な集団化が進められた1950年代後半以降1980年代末までの時期を扱い、社会主義的な牧畜協同組合が所有する「共有家畜」と各牧民が所有する「私有家畜」それぞれに対する管理方法や認知の相違を検討する。4章では、市場経済に移行した1990年代初頭以降を取り上げて、牧民が私有の家畜を基盤とする自律的な牧畜経営を始める中で、家畜が類として扱われたり、個別なものとして扱われたりする過程を検討する。そして最後に、マクロな政治経済の変化の中で生きるモンゴル牧民における家畜の個性に対する認知のあり方について議論する。

2. モンゴルの牧畜をめぐる自然環境と政策史

2-1. 自然環境

モンゴル高原は夏雨型の乾燥地域であり、植物の育成期である夏が短いのに対して、寒さの厳しい冬が長く、気候の年変動が大きいことが特徴である。このため、牧民にとっては、夏に育った一定量の草をうまく利用することで、冬から春にかけての家畜の疲弊を防ぐことが重要な課題である。だが毎春、弱った一部の家畜が死ぬ。そのうえ、モンゴルではこれまで数十年に一度ずつ、気候の予期できない大きな変化によって、家畜の大量死が発生してきた。これは、

ガン (*gan*) とよばれる夏の干魃と、冬に例年と比べてとくに厳しい寒さや多量の積雪に見舞われる「ゾド」(*zud*)⁵⁾ とよばれる気象条件が重なり合って発生することが多い。春に家畜が大量死する現象そのものもゾドとよばれる。とくに、1944年の冬から1945年の春にかけてと、1967の冬から1968年の春にかけてモンゴル全土を襲ったゾドは記録的な被害をもたらした。近年では、1999-2000年と、2000-01年の2年連続で多くの地域がゾドに見舞われた。1999年末と2000年末の全国の家畜総頭数を比べると、約3,357万頭から約3,023万頭に減っており、10%が失われている。このように、家畜は自然に対してどうしようもなく弱く、牧民の生活は家畜のそのような脆弱さのうえに成り立っている。

2-2. 牧畜政策の変遷

モンゴルでは1921年に人民革命がおきたが、牧畜地域においては1920年代まで世帯を単位とした個別の牧畜経営がおこなわれていた。ところが、二木博史によると、1930年代初頭に極左の政権により性急かつ強制的な集団化政策がおこなわれた。これは強い反発を生み、1932年には路線転換が図られて再び私的所有に基づく個別の経営が国家の牧畜生産の基本方針となった〔二木 1993: 115〕。

1950年代後半、再び牧畜の集団化政策がおこなわれた。これは、社会主義的な経済計画のもとで経営を集約化して生産性を向上させることを目的とし、具体的には次の2つの施策がおこなわれた。第1に、封建貴族やチベット仏教の寺院などの、少数の個人や宗教組織によって占有されていた多くの家畜や土地が公有化された。第2に、各郡にひとつずつ牧畜協同組合 (*kho'doo aj akhuin negdel*)、通称「ネグデル」(*negdel*; ①統一・連合、②協同組合⁶⁾) がつくられ、小規模な個人経営の牧民たちはそのメンバーとして組織された。メンバーの所有する家畜については、一部は私有財産として残されたものの、大部分は組合の財産として共有化された。本論では、1950年代後半から1980年代末までの集団化政策のもとで牧畜生産がおこなわれていた時期を「ネグデル期」とよぶ。

ネグデル期の牧畜政策は次のような変遷をとげた。ネグデル期は、1955年に全国規模の第1回ネグデル員会議が開かれて「ネグデル模範定款」が承認されたときに始まる。定款には、組合員の所有する家畜のうち、共有化すべき部分と個人財産として残せる部分とが明示され、前者は「共有家畜」(*khamtyn o'mch bolokh mal*)、後者は「私有家畜」(*khuviiin mal, aminy mal*) と呼ばれた。私有家畜の総頭数には上限が設けられ、原則として、砂漠性草原 (*gov'*) 地域では1家族に150頭まで、森林性草原 (*khangai*) 地域では100頭までと決められた⁷⁾ [モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 [1969] - 2: 137]。

その後、集団化は強化されていった。1959年の第2回ネグデル員会議では私有家畜の上限は半分に減らされた [前掲書: 143]。この結果、実際の世帯あたりの私有家畜の平均頭数も、

前年の 62 頭から半減して 33 頭となり [前掲書: 143], 1964 年には 25 頭まで減少した [坂本 1969: 86]。

ネゲデル期の生産単位は生産小隊 (suur) であった。生産小隊は、1～3 世帯が近接して移動式天幕「ゲル」(ger) をたてて居住集団をなし、協力して牧畜の労働を行う単位である。世帯は原則として、夫婦とその未婚の子どもをメンバーとする核家族からなる。労働力の豊富な世帯は単独で、労働力が少ないあるいは技術の未熟な世帯は複数で組になり、これを構成した。子どもは 16 歳で一人前の労働者とみなされ、結婚すると新しい世帯をなした。

しかし 1980 年代にソ連でペレストロイカが始まるとモンゴルでも経済改革が始まり、牧畜分野でも制度改革がおこなわれた。1980 年代末からは、仔畜の育仔率に応じて仔畜の一部を得られる新しい制度が導入され⁸⁾、一部の牧民は、私有家畜を蓄積し始めた。時を同じくして私有家畜の頭数制限が緩和され、さらに 1990 年には頭数制限は撤廃された [二木 1993: 120-121]。

1950 年以降の全国の総家畜頭数と私有家畜の頭数の推移を見ると (図 1), 1960 年以降 1980 年代半ばまでその数は両者ともにほとんど変わらず、私有家畜が総家畜頭数に占める割合は 2 割程度にとどまっている。残り 8 割は共有家畜であった。ただし 1980 年代後半からネゲデルの家畜管理制度が変わり、それとともに家畜の総頭数と私有家畜の頭数および割合が増えている。

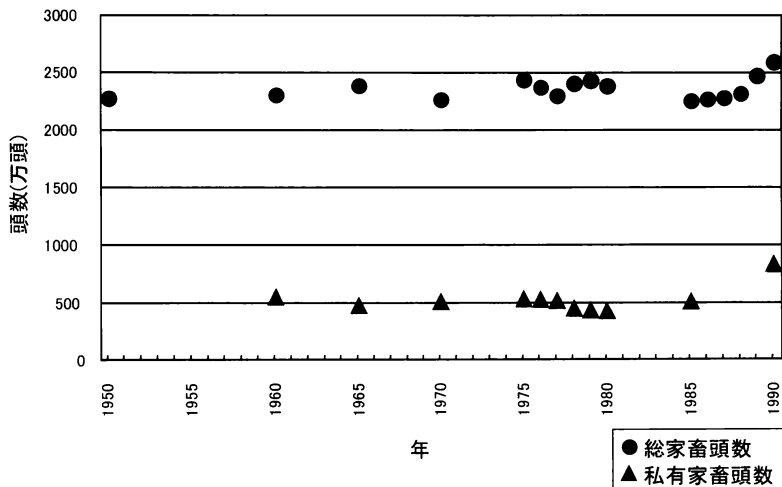


図 1 全国の総家畜頭数と私有家畜頭数の推移

(典拠) National Statistical Office of Mongolia 1998: 134, Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR 1981: 178, 181 より筆者作成。

(注) 1960 年までの統計調査は 7-8 月に行われ、1965 年以降の調査は 12 月に行われている。

そして、民主化運動の高まりの中で1991年末には全国のほとんどのネグデルが民営化され、ネグデルの家畜は人々に分配され始めた。そして1990年代前半までにはほとんどの家畜が私有化され、牧民たちは再び、私有家畜を基盤とした自律的な牧畜経営を始めた。本論では1990年代初頭以降を「市場経済化期」とよぶ。

2-3. デレン郡での調査概要

この論文のもとになるデータは、モンゴル国ドンドゴビ県(Dundgov' aimag) デレン郡(Deren sum) (図2) の一つの遊牧民家族のゲルに住み込み、2001年6月11日から6月30日までおよび8月14日から9月16日までの計53日間に収集した。

デレン郡は首都ウランバートルから南へ約200 km のところに位置する39万 ha の面積をもつ行政領域である [Deren sum 1980年代後半]。地域区分としては砂漠性草原に属する。デレン郡の人口は2,600人、世帯数は612戸である。このうち463世帯が、年間を通して草原に住居をおいて牧畜に従事している世帯つまり「牧畜世帯」である(2000年12月現在。デレン郡役場作成の未公開の統計による)。主な産業は牧畜である。

砂漠性草原地域では一般に、人口密度と家畜密度が他の地域に比べて低い。そのうえデレン郡では、居住集団の規模も小さく、多くの世帯が単独でキャンプしていた⁹⁾。このため、本調査ではひとつの家族に焦点を当て、彼らとその家畜群との約60年間の関係を緻密に記述する方法をとった。

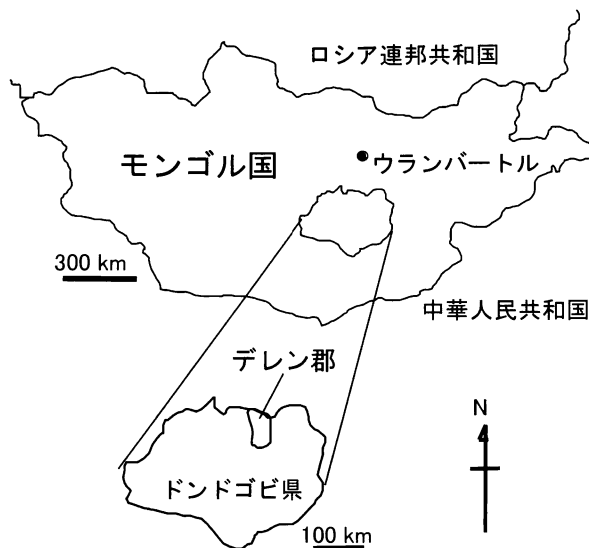


図2 調査地の地図

住み込み調査を行ったのは、DD (76 歳, 男性)¹⁰⁾ を世帯主とすることから牧民のあいだで「DD のもの」(DD-*giinkh*) などとよばれる牧畜世帯である。これを本論では DD 家と呼ぶ。モンゴルでは、原則として夫婦と未婚の子らからなる核家族が、居住・家畜所有・消費の単位、すなわち「世帯」をなし、家畜は世帯主の名義で私有財産として登録され課税される。DD とその妻 bz (63 歳) の間には 5 人の成人した子があり (図 3), 長男 BJ (40 歳), 次男 TL (37 歳), 長女 tg (34 歳) はそれぞれ結婚して郡や県の中心地といった定住区に住んでいる。未婚の三男 DJ (31 歳) および次女 ot (22 歳) とその夫 (24 歳) と息子 (3 歳) は両親と同居している¹¹⁾。定住区に住む息子や娘も家畜を所有していて、家畜の全部または一部を DD 家に預けている。DD 家は、婚出した 3 人の子の家畜に加え、知人 1 人の子の家畜も預かっており、これら家畜群をまとめて管理している。2001 年 8 月に DD 家が管理していた家畜の頭数は 259 頭で、そのうち DD 家の所有する家畜は 215 頭であった。

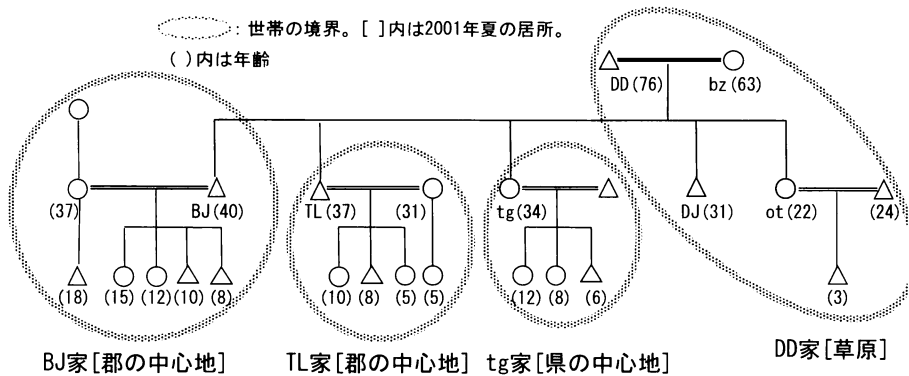


図 3 DD とその子どもらの家族

3. ネグデル期の家畜管理

3-1. 家畜の所有関係と牧民の立場

デレン郡には 1954 年、「ナイラムダル」(*Nairamdai*; 平和, 友好) という名称のネグデルが設置された [Deren sum 1980 年代後半]。以後、デレン郡の牧民はこのネグデルの組合員として組織され、彼らの家畜の大部分がネグデルの共有財産とされていった。

ネグデル期の牧畜業の中心は、共有家畜を基盤とした畜産物生産であった。二木は、家畜を「共有」化することの意味について次のように述べている。1955 年の模範定款では、「牧民がネグデルに所有を移した家畜の 50% までの登録、返還が可能」[二木 1993: 116] と定められていた。しかし集団化が強化されるにつれ、1960 年代末以降になると「ネグデル員にとって、

ネグデルの家畜はすでに自分たちの共同所有物ではなくなり、私有家畜のみが真の所有物になった」[二木 1993: 118]。このように、社会主義の理念では、共有家畜の生産を向上させることが牧民のもっとも重要な務めとされる一方で、牧民と共有家畜のあいだには所有関係にもとづく思い入れはなくなっていた。他方で、ネグデルの制度下にあっても依然として牧民のもちものである私有家畜は、周縁的であったが特別な存在であった。

ネグデル期には、国家の5カ年経済計画にもとづいて、年度ごとに各県、各郡に対して生産達成課題が与えられた。課題は、乳・肉・毛などの生産量のほか家畜増加率や損失抑制率にいたるまで詳細に決められており、ひとつの県内のすべての郡（ネグデル）が、その達成率をめぐる競争関係におかれていた。このためネグデルは、牧民各人に対して子細なノルマを課していた。牧民は、一定頭数の共有家畜を一定期間にわたって預かり、時期ごとに決められた種類と量の畜産物を収穫してネグデルに納めることになっていた。この時期の牧民の立場は、国家調達制度が機能する計画経済の中で各種の生産割当を課せられたネグデルの共有家畜を預かり、畜産物供出のノルマをこなすことを義務づけられた家畜管理労働者であった[二木 1993: 199]。だがそれは楽なものではなかった。牧民は、預かる家畜の種類と頭数に応じて定期的に基本報酬を得ることになっていたが、これはきわめてすくなく、各時期のノルマ達成度に応じて追加される報償を得ることでやっと生活を維持することができた。そのうえ、ノルマを達成できなかった場合には給料から天引きされたり、私有家畜による埋め合わせによる損失補填がなされていた。

3-2. 共有家畜の管理方法

共有家畜は原則として、種・性・成熟度別に分けて管理された。このように家畜をカテゴリー別に分けて管理する方法が依拠していたのは、分業によって効率が上がるという工業モデルに基づく経営理念であった[稲村ほか 2001: 128]。すなわち、1人あるいはひとつの生産小隊の牧民が扱う家畜のカテゴリーを限定することで、多数の個体を少ない労働力で管理することが目指されていた。牧民は、種・性・成熟度の特化した均一な群れを1年間などの短期間の時間幅でネグデルから預かり、これを放牧して畜産物を生産した¹²⁾。以下では、家畜の種ごとにどのような群れ編成がなされていたのかを、デレン郡の人々からの聞き取りにより、具体的に示す。

まず、モンゴルではヒツジとヤギはいつの時代も基本的にまとめて一群として管理されてきた（これをヒツジ・ヤギとよぶ）。ヒツジ・ヤギは性・成熟度によって、出産するメス（これを、出産メス群とよぶ）、オスや妊娠しなかったメスを含む成熟した個体の群れ（不妊群）、6カ月～18カ月齢の仔ヒツジ・仔ヤギ群（仔畜群）の3つに分けられた。このように分ける理由は、育仔や乳生産の関係する出産メス群に対して他の個体よりもこまやかな世話をおこない、成長度

に応じて異なる速度と範囲で放牧するためである。

出産メス群を担当する生産小隊は、秋に出産メス群を預かり、翌年の3～4月の一斉出産の時期には新生仔の育仔率がノルマに達するように死亡率を抑える努力する。夏には、ノルマに従って乳と毛を収穫し、ネグデルに納める。オスの仔は去勢する。そして8月になると仔畜を母から分離して、仔畜群を世話する別の牧民に受け渡す。そして反対に、仔畜群からは約18カ月齢に達したメスが出産メス群に受け渡される¹³⁾。出産メス群の世話はもっとも経験と技術が必要とされ、育仔率を上げると高い社会的評価および金品による報償が与えられた。だが失敗すると、他の群れの担当に変えられた。

仔畜群の担当者は、秋に、5～6カ月齢の仔畜を預かる。DD家は約700頭を預かった。そして1年間放牧して成長させた後、翌年8月にオスは不妊群へ、メスは出産メス群へと引き渡される。それと同時に、仔畜群の担当者はまた新規に、5～6カ月齢の別の仔畜を預かるのである。

不妊群の担当者は、約18カ月齢以上のオスおよびその年に妊娠しなかったメスを、多い場合には合わせて1,000頭近く預かる。そして首都に出荷するまでの数年間、肥育する¹⁴⁾。不妊群の世話はもっとも簡単で、経験がない牧民でもできたが、報償も少なかった。

ヒツジ・ヤギを首都へ出荷するさいには、生きたまま肥育しながら移送した。とくに若い男性は、2～5カ月間ウマやラクダで首都まで旅をして見聞を広め、成功すれば高収入が得られるこの仕事を好んだ。5月、男性3人が1生産大隊をなして、性別、種別に分けられた約1,000頭の群れを預かった。これには、デレン郡中から集められた共有家畜・私有家畜の、十分に肥って出荷に適したオス、老いて妊娠しなくなったメス、発育が悪く間引き対象となった仔畜、が混ざっていた。このとき全個体が体重を測定され、移送担当者は、預かった家畜の総重量を、10月に首都で納品するまでに何トン増加させるべきかノルマを与えられた。そして首都近郊にて再び体重測定をし、総重量がノルマを越えると報奨金や家畜が与えられ、首都で休んでからお土産を買って家路についた。

ウシは、出産するメスとその仔畜（出産メス群）、12～36カ月齢のオス（若オス群）、12～36カ月齢のメス（若メス群）、36カ月齢以上の成熟したオス（成オス群）の4つに分けられた。群れをこのように分ける理由は、ヒツジ・ヤギとほぼ同様である。

出産メス群の担当者は、2～5月に集中する出産の世話をし、出産日から搾乳を始め、乳を毎日ネグデルに納める。翌春、仔畜を若オス群または若メス群を担当する牧民に引き渡す。若メス群は、早すぎる妊娠を防ぐために種オスが近づかないよう注意のもとで育てられ、36カ月齢に達すると出産メス群に移されて種付けの対象となる。若オスは去勢されて1年間育てられた後に成オス群に入れられ、肥育の対象となる。

ラクダは性成熟が遅く、頭数も少なかったため、出産するメスとその36カ月齢過ぎまでの

仔畜（出産メス群）と 36 カ月齢以上のオス（成オス群）の 2 つのみに分けられた。デレン郡ではラクダは主に荷駄用・騎乗用に飼育されていた。出産メス群の担当者は、たとえば DD 家の経験では約 60 頭の出産メスとその未成熟の仔らを預かった。オスの仔は、36～48 カ月齢で成オス群に移され、去勢される。メスはそのまま出身群に残り、48 カ月齢に達すると出産する。成オス群の担当者は約 100 頭の去勢オスと数頭の種オスを預かり、冬から春の発情期には種オスが出産メス群に移された。

ウマは、性・成熟度別に群れを分けられることはなく、種オスが自発的に 20～30 頭の出産メスとその仔・去勢オス・若いオスやメスを統率して集団をつくるのに任せられていた。ウマを担当する生産小隊は 2～3 世帯からなり、約 100 頭のウマを預かり、そのなかに 4～5 頭の種オスがいた¹⁵⁾。また、ウマの用途は主に騎乗と搾乳であり、その多くが自然死し、食用利用は少なかった。

以上がデレン郡における代表的な群れ編成のしかたである。まず、ネグデル期の牧民と家畜の関係について、DD 家の経験から考えたい。DD 家はネグデル期に 5 種すべての家畜、具体的には、出産ヒツジ・ヤギ群、成ウシ群、出産メスウシ群、出産ラクダ群、成オスラクダ群の管理を担当した。とくにラクダを担当した年数が多い。このように牧民は種・性・成熟度別に分けられた特定のカテゴリーに属する均一な群れを 1 年から数年預かり、また別のカテゴリーの群れを 1 年から数年預かっていた。たとえ数年間連続して同じカテゴリーの群れを預かっていても、そこに属する個体は原則として、年毎に異なった。たとえばヒツジ・ヤギについては、6～18 カ月齢の仔畜群を担当する生産小隊では、翌年も同じ仔畜を担当したとしても具体的に世話するすべての個体が入れ替わった。出産メス群を数年間連続して担当する生産小隊だけは同じ個体を数年間にわたって世話することになった。だが、取り上げた仔畜はすべて生後半年で仔畜群の担当者に引き渡した。このため、ある牧民の管理下にあるネグデルの群れの中で系譜的連続が生まれることはなかった。

次に共有家畜の個性について検討する。共有家畜は牧民に預けられる時に頭数が数えられ、また 1 頭 1 頭が体重測定されて群れ個体の総重量が記録された。つまり、数あるいは量として管理されていたのである。そして、出産群であれば出産・育仔率、不妊群や食肉用出の荷群であれば体重増加、そして損失に関しても許容範囲内に抑えることがノルマとして課せられた。そしてノルマを果たせなかった牧民は出来高制の手当を受けることができず、別の言い方をすれば現金で埋め合わせをしなければならなかった。一方、連続して高い業績を上げると、より多くの家畜を預かることができ、基本報酬が増えるうえに 3 年目、5 年目などの区切りには表彰され報償を与えられた¹⁶⁾。このため業績のよい牧民は、損失が出た場合にもこれを私有家畜で補填することにより、ノルマを達成したように見せかけるという工夫もおこなっていた。以上からいえるのは、第 1 に、共有家畜は頭数あるいはマスとして扱われていた。第 2 に、その

数量の増加は生産性の向上とみなされて金品による報酬という形で牧民に返ってきたため、牧民はある個体を別の同種カテゴリーに属する個体で代替することがあった。反対に、共有家畜の数量を減少させると、それが現金換算されて給料から天引きされたように、ある個体や個体の肉は現金と代替可能とみなされていた。このように、共有家畜が他の個体や現金と交換可能なものとして扱われていたことは、共有家畜が集合的に類として認識されていたことを示すものである。

3-3. 私有家畜の管理方法

デレン郡では、少ない時期は1世帯に75頭まで、多い時期に150頭までという制限付きで、牧民が私有家畜を所有することが認められていた。私有家畜は頭数は少ないながらも、牧民の手元で世代を重ねて繁殖していた。ただし私有家畜についても牧民は、その所有頭数に応じて、乳・毛・肉を生産してネグデルに納めるノルマが課せられていた。納品した生産物に対しては対価が支払われたが、極めて少額だった。私有家畜の放牧は、共有家畜に混ぜておこなわれていた。牧民は、自分が担当する共有家畜に混ぜて自分の私有家畜を放牧し、それができない異なる種類の私有家畜については、同種の共有家畜を管理している他の人に預けて放牧してもらっていた。

私有家畜の個性については、ネグデル期のモンゴルを訪問したオウエン・ラティモア〔ラティモア 1966 [1962]〕の報告から、当時、牧民が私有家畜を個体識別していたことがわかる。ラティモアによれば、他人に預ける私有家畜には所有者の焼き印か耳印を付けることがあるが、付けないこともある。そして、共有家畜である1,000頭近いヒツジ・ヤギの群れの管理を担当している牧民が、その中に混ぜて放牧している他人の私有家畜を「これは彼が今年入れた2歳羊、これが去年入れた4歳羊です」と言ってすばやく選り分けると述べている〔ラティモア 1966: 201〕。これは、各個体が個体識別され、その成長段階と所有関係に関する情報が認識されていたことを示唆するものである。

以下では、ネグデル期の私有家畜は牧民にとってどのような存在だったのかをDD家の人々の語りに依拠して示していく。まず、DDの私有家畜であるウマの群れの形成過程の事例を示す。

【事例1】60年間続く家系

DDは1925年生まれである。彼は1940年代初頭、10代後半の頃に現金50 *to'g* (トゥグルク。モンゴルの通貨単位) で未經産のメスウマ(24~36カ月齢)を買った。

数年後の1944年の秋、DDは20歳で徴兵されて日本軍と対峙する東部国境付近へ送られた。ところが、この年の冬から翌春にかけてデレン郡は酷いゾドに襲われた。家畜は飢

えと寒さのために弱り、次々と死んでいった。この時、故郷に残っていた DD の家族は、ウマの群れを遠距離放牧によって救おうと考え、キャンプしながら何日もかけて群れを南方へ導いていった。しかしある夜、群れが中国との国境を越えて南進して行ってしまった。国境警備員に気づかれないように中国の内蒙古に入って馬群を探し回ったがみつからず、このとき群れの大部分を失ったという。

この 1944-45 年のゾドによって DD の家の家畜のほとんどが死んだり行方不明になったりして失われた。だが DD が復員したとき、例のメスウマが生き残っていた。その後も、1967-68 年のゾドをはじめとする厳しい冬、春を何度も経験したが、そのなかで例のメスウマの子孫は少しずつ増えていき、現在もその家系が続いている。DD の馬群のなかに今日いる数組の母子ペアや数頭の去勢オスはその子孫であるという。

この例は、ネグデル期以前に DD が購入した 1 頭のメスウマが、DD の経験においても現代モンゴル史においても最も厳しかった 1944-45 年のゾドを生き抜いて子孫を残し、その子孫は 24 年後の大きなゾドをも生き抜いて増え、今日まで続いていることを示している。このウマの家系は DD 家の家畜のなかで最も古くから続く家系であるが、約 60 年間も系譜が続いてきたことは、モンゴルの自然・社会両面での環境変化を考慮すると驚くべきことである。

このことの意味をまず自然環境との関係で検討する。1944-45 年のゾドでは家畜の斃死、病死、さらにはこれらから救おうとして敢行した遠距離放牧中の事故で多くのウマが失われた。ゾドの時期には一般に、盗難などの副次的な被害も発生する。その後も十数年ごとに厳しい冬を経験し、多くの家畜が失われた。だが家畜は牧民にとって最大の財産であるので、彼らは最善を尽くして家畜を守ったはずである。このメスウマの家系が現在まで続いたことの背景には、ある程度「自然選択」が働いたと考えられる。

一方で社会状況に注目すると、ネグデル期には政策変更に伴う私有家畜頭数の上限の変化や、上限を越えた私有家畜を共有化するという規制により、私有家畜に対する牧民の所有権はたえず脅かされていた。このように私有家畜の所有枠が限られるなかで例のメスウマとその子孫が残されてきた背景には、ゾドを生き抜いた個体や家系が、生命力の強い優れた素質をもつ血統として利用価値を認められて人為選択されたという事情があるだろう。

だがとりわけ DD の語りから強く印象づけられるのは、過去にいたウマの各個体のことを思い出すと、その時々 of 彼自身や家族の状況が同時に思い出されて昔語りが紡ぎ出されてしまうような、DD とウマたちとの関係である。それと同時に、60 年前に入手した一個体と現存する数頭の個体が家系の連続でつながるものと認知されている点も注目に値する。というのも、このような数世代の深度をもつ母系の系譜関係の認知は、家畜の母子関係が把握されてはじめて成立するからである。さらには、母子関係が把握されていたという事実は、その前提とし

て個体識別がなされていたことを示唆するものである。個体識別については4-3.で詳しく述べる。

次に私有家畜の一個体が、その生い立ちや個性、人々の社会関係のなかで特別視されていた事例を示す。

【事例2】特別なヒツジ

1980年代初頭、DDは12～24カ月齢のメスヒツジを他の牧民から現金にモノを足して交換で入手した。このヒツジがDD家に来た頃、長女tgは6年生でデレン郡の中心地にある学校へ通っていた。やっと3歳になった末娘のotはこの頃いつも、当時DD家にあった小さな木箱に座って遊んでいた。ちょうどいまのotの息子と同じ年頃の一番かわいいときだった。

その冬は、ゾドではないが厳しい吹雪に見舞われた。だがこの若ヒツジは生き残った。そして成長してメスの仔を生み、それがまたメスの仔を生んだ。孫娘にあたるこの個体が生まれたのは1988年春のことだ。この仔は母から十分な哺乳を受けられず、オグジ(ugji)と呼ばれる牛角製の哺乳瓶を使って人間に哺乳されて育った。人口哺乳で育った個体はオグジと呼ばれるが、この仔もオグジであった。当時DD家はスフバートルという人と一緒にキャンプし、ネグデルからヒツジ・ヤギの群れを預かって管理していた。

このオグジの仔ヒツジは人によくなついたので、家族がますますかわいがって揚げ菓子やアメをあげるとついて来るようになった。やがて「デルベー」(*Delbee > delbe*; ①花卉 ②耳たぶ)と呼ばれるようになり、デルベーが名前となった。デルベーは、「花つき」(*tsetsegtei*)と表現される白地に黒の水玉模様の大きな耳をもち、走ると横に広が(*delbegnekh*)った。

DDとbz夫婦はデルベーが1歳を過ぎた頃、これを末娘otに与えた。年の離れた末娘otはDD家のみんなからかわいがられていた。家畜のなかで特別にかわいがられていたデルベーは、otのものになったことで、もはや誰もこれを屠殺できなくなった。それでこのヒツジは食べないことになった。デルベーは長生きして何度も出産し、2000年に12歳で天寿を全うした。その子孫は現在でもDDのヒツジ群のなかに7頭を数える。またデルベーの祖母まで遡れば、血縁関係のある個体は20～30頭にのぼるという。

この例でも、ある家畜個体のことを語ろうとすると、同時期の家族の生活状況が思い出されて一緒に語ってしまうような、家族史の一部あるいは家族のある一時期を象徴するモノとしての家畜の姿が浮かび上がる。とりわけ注目したいのは、家畜が所有者との相互交渉の積み重ねのなかでその意味を変化させていった点である。また基本的事実として、ネグデル期に牧民

のあいだでは私有家畜の売買が行われていたことが示されている。

DD は 1 頭の若いメスヒツジを商品交換し、これが子孫を増やした。ところが孫の代では、1 頭の死ぬべき状況にあった仔が DD 家の人々に人口哺乳されて大切に育てられたことにより一命を取り留めた。牧民は、私有家畜を共有家畜よりも熱心に保護したようである¹⁷⁾。私有家畜と共有家畜の仔畜育成率と成畜の損失率を比較すると、共有家畜に比べて私有家畜の育成率ははるかに高く損失率は格段に低いことが指摘されている〔二木 1993: 118〕。

人口哺乳で育てられた仔はその経験をきっかけとして人間とのあいだに人格的な関係を取り結び、まずは他の仔ヒツジから区別され、「オグジ」とよばれた。オグジは人なつこい性格であったためにかいわがられ、また耳の形が際だっていたことからその身体特徴に由来する「デルベー」という固有名が定着していく。そして名前を呼ばれると追従するなどの行動特徴によって人間との人格的な関係が強化されていった。さらに、家族のなかでも特別な存在であった末子の ot に贈与されることで、結果としてけっして屠殺しないという前提で飼われるいわばペットのような扱いを受けた。

なおメスの家畜の所有者は、その個体の母系の子孫すべてに対しても所有権をもつので、デルベーの子孫は今でも ot のものとして家族のなかで認知されている。

3-4. ネグデル期における家畜の管理と意味づけ

ネグデル期の牧畜生産の中心に位置づけられる共有家畜の管理には、次のような特徴がみられた。まず、家畜は種・性・年齢カテゴリー別に分けられて均一な群れとして編成され、1 年間という短期の時間区分で預受託関係が更新されることにより、多くの牧民が毎年異なる個体の世話をした。そして家畜は数や量として把握されていた。牧民には、群れの個体の総重量を決められた量以上増加させることや、一定頭数以上の仔畜を育成することがノルマとして課せられ、失敗すると現金や同等の他個体での補填がなされた。以上のような家畜管理システムは、人間と家畜のあいだにどのような関係が生んだだろうか。

第 1 に、基本的に家畜とその管理者の組み合わせが固定しなかったため、牧民は、1 年だけ預かっている個体について、日々の管理のなかで得られる情報以上の知識をもたなかった。もしも数年間継続して特定の個体を管理したり、群れの内部で再生産が繰り返されれば、牧民は自分の管理している家畜について他の誰よりも豊富な知識をもつだろう。また、その家畜が「自分のもの」とであるという気持ちを抱いたり、言葉を換えれば占有権のような関係が生じる可能性もある。家畜とその管理者の組み合わせを固定化させないシステムは、家畜に対するネグデルの所有権を年毎に明示し、維持する制度としても機能していたと考えられる。

第 2 に、家畜は数や重量として管理されたため、牧民は家畜の個性性に注目するよりもむしろ、群れを集合として扱った。つまり、ある性・成熟度カテゴリーに属する一頭は、同じカ

テゴリーに属する別の一個体と代替可能なものとみなされていたのである。このことは、家畜が死亡したときに他の個体で埋め合わせをしていたことに端的に示される。さらにいえば、生き物である家畜は、同一の個体が、時間とともに成長してある成・成熟度カテゴリーから別のカテゴリーに移行するものであるにもかかわらず、群れを性・成熟度別に編成し、かつ1年ごとに預受託関係を仕切直すしくみは、家畜の成長による変化を無視するものであった。たとえば、ある年の6～18カ月齢のヒツジ・ヤギと翌年の6～18カ月齢のヒツジ・ヤギは別の個体であるのにこれは同じモノとみなされ、ある年の6～18カ月齢のヒツジ・ヤギが翌年には別のカテゴリーに属する別のモノとして扱われたのである。

ネグデル期の私有家畜についてはどうだろうか。これも計画経済の枠組みのなかにあっては基本的に、共有家畜と同じようにノルマが課せられた「商品」であった。しかしながら、何年も連続して牧民の手元にとどまり、成長と再生産が繰り返されたことから、人間と家畜の関係は共有家畜とは異なる展開をみせた。牧民は、私有家畜を個体識別していた。そのうえで、個体レベルと家系レベルの両方において、成長・死・再生産といった変化と連続に関わる情報を知識として蓄積していた。さらに、私有家畜のなかには、人間との継続的な相互交渉を通じて特別な関係を取り結び、商品からこぼれ出て「単独化」される個体があった。また牧民がネグデル期の私有家畜について語るとき、家畜が、家族の過去に関する記憶を喚起する手がかりとなることがあった。

4. 市場経済化期の家畜管理

4-1. 私有家畜に依拠する生活

デレン郡では1990年5月頃、ネグデル員会議で「ネグデルを出る人はいますか」という問いに応じて世帯単位で14の世帯がネグデルを脱退した。彼らは、組合への出資財産の分与として世帯員1人あたり7頭の家畜を与えられ、私有家畜を基盤とした世帯単位での牧畜経営をいち早く開始した。それから間もない1991年秋、ネグデルの民営化が始まった。すべての組合員が段階的に、もとネグデルの共有家畜であったものを私有家畜として取得していった¹⁸⁾。デレン郡の牧民たちはいま、世帯ごとに、複数種類の家畜を所有し、季節的に遊動しつつ、これらの家畜を基盤とした牧畜経営をおこなっている。

調査時点でデレン郡の牧民が管理していた家畜のほとんどが私有家畜であった。その来歴は以下の3種類であった。ネグデル期からの私有家畜とその子孫、民営化時に得た家畜、そしてその後の様々な機会に交換や贈与によって得た家畜、である。市場経済の下で生きる牧民たちは、自分の所有する家畜を資本として世帯単位で自律的な牧畜経営をおこなっている。

市場経済化のなかで、牧民にとっての消費の機会は増えている。社会主義期にはネグデルが

決定し、提供していた、家畜に対する医療サービスや冬用の飼料をはじめとする牧畜に必要なすべてを、牧民は自分で選択し、調達しなければならなくなった。また以前は無償であった子どもたちの教育や人に対する医療サービスの一部に受益者負担が導入された。それに加えて、草原には、ラジカセ・発電機・テレビなどが商人によって持ち込まれ、消費への欲望がかきたてられている。自動車やバイクの数も増え、絶えず燃料を補給する必要性が高まっている。

このように、それまで商品でなかったものが商品となり、新しいモノが商品として入ってくるという変化のなかで、家畜が、牧民の生活を多面的に支えている。家畜は、それ自体が食料となり、また食料やその他の畜産物を生産するうえに、現金を含むさまざまな物品やサービスの獲得手段として利用される。たとえば DD 家では 2000 年秋からの 2001 年秋までの 1 年間に、自家消費および小麦粉や日常生活用品に対する支払いのために合計約 20 頭のヒツジ・ヤギを消費した。家畜の使用価値としては、自家用の食肉としての消費は少なくない。モンゴル人は肉の入っていない料理は食事とみなさず、毎日必ず 1 回は肉の入った料理を食べるからである。交換価値としては、小麦粉・米・衣服・生活雑貨など、定期的に補充しなければならない必需品を入手するための直接交換の手段として用いられる。また現金獲得のため、家畜を地元の商人に売ったり、一定頭数をまとめて屠殺して首都の家畜市場に持ち込んで売却したりする。現金は、役所や物々交換を受け付けない商店におけるサービスや物品に対する支払いのために必要不可欠である。

4-2. 貯蓄財としての家畜の脆弱さ

ネグデル期には、共有家畜が無名の集合として扱われていたのに対して、私有家畜は大切に世話され、なかには強い個性が付与される個体があった。では、家畜のほとんどが私有化された市場経済化期には、私有家畜の個性はどのように扱われているのだろうか。

調査をおこなった 2001 年は、2 年連続のゾドにより多くの家畜が失われた直後であった。DD 家でも多くの家畜が死んだ。DD 家が管理していた家畜の総頭数は、1999 年末には 513 頭であったが、その後春までに激減して 2000 年末には 258 頭となり、2001 年になっても出生率が低かったり盗難にあったりしたために増加せず 2001 年 8 月現在で 259 頭であった。

そのような時期であった 2001 年の夏、デレン郡の牧民たちのあいだではゾドで失われた家畜のことがよく話題にのぼった。DD は、ゾドの話をするたびに「家畜は悪いウムチ (o'mch; ①所有、財産、②私有財産) だ」と言った。理由を問うと、家畜はどんなに多くてもたった一度の冬で一挙に死んで失われるからだという。「ウムチ」には家畜以外に何があるか尋ねてみた。DD の妻 bz はウムチとよべるものとして、貴金属の指輪、腕輪、耳飾り、銀の飾り付きの鞍、銀の飾り付きの馬銜、絨毯を挙げた。これらは、DD 家の子どもらが結婚するときに、DD と bz が実際に与えてきたものであるという。つまりウムチとは、私的所有権によって所有者と

の関係が定義されるような財産であり、家畜をはじめとする親から子への分与や相続の対象となるものだといえる。DD は、家畜以外のウムチが恒久財であるのに対して、家畜は生き物であるゆえに死んでしまうという貯蓄財としての弱点を指摘している。モンゴル人は決して、病死や自然死した家畜の肉は食べないので、家畜は死ぬとその価値が無に帰する。

そこで家畜のもつ価値の保存機能について、ほかの財と比較しながらより詳細な検討を加えていく。

【事例 3】貯蓄財としての家畜の価値

(近隣キャンプの 42 歳の男性が DD 家を訪れ、DD、bz と 3 人で家畜に関する四方山話をしていた。)

DD は約 1 年前、家畜（ウシ、ヒツジ、ヤギ各数頭）と交換で銀の飾り付きの鞍を入手して三男 DJ に与えた。長男 BJ が結婚したときには DD が、次男 TL が結婚した時には bz が、自分のもっていた鞍を与えたので、30 歳を過ぎたが当分結婚しそうな三男 DJ にもそろそろ立派な鞍を与えようとして買ったという。これを聞いた訪問中の男性も、同じ頃にウシ 12 頭、去勢オスヒツジ 6 頭、去勢オスヤギ 6 頭と交換で、銀の飾り付きの鞍および乗馬の尻をたく棒をセットで手に入れたと語った。その後デレン郡はゾドに襲われたのであるが、2 人は、鞍などと交換では多くの家畜を手放したが、その後のゾドでさらに多くの家畜がただ死んで失われていくなかで、鞍だけは手元に残ったことを喜び合った。

続けて DD は、長男 BJ が一昨年ヒツジ 200 頭と交換でロシア製の四輪駆動車を得たが、間もなくしてこの自動車をポンコツだと言って売り、家畜を取り戻したことを話した。その後デレン郡はゾドに襲われたため、BJ は一度は入手した自動車を手放したばかりか、自動車と交換で取り戻した家畜を含むほとんどすべての家畜を失い、ゾドの後に一切の財産を失っていたという。筆者が後で BJ から聞いたところによれば、BJ 家の家畜は 1999 年末には 180 頭を数えたが、2001 年 8 月現在たったの 17 頭である。

この事例では、牧民らがゾドの直前におこなった家畜とほかの財との交換を振り返り、ゾドのあいだに家畜を維持していた場合と、家畜と交換で得られたほかの財物を所持していた場合との結果を比較している。この例から家畜は、ほかの財を得るための支払い手段として利用できると同時に、ほかの財によって入手することもできるような財とみなされていることがわかる。また価値の保存手段として、銀の飾りの付いた鞍といった世代を超えて相続されるような文化的価値をもつ財や、自動車という消耗品であるが使用価値の高い財と比較される対象となっている。そして、ほかの財と比べての自然に対する脆弱性がここでも問題とされている。不可避かつ予想できないゾドの脅威のもとで生活する牧民が、財をどのような形態で貯蓄するかを考えると、家畜は鞍や自動車と並ぶ選択肢のひとつとされている。

以上から、家畜はほかの財や現金と交換可能な商品として捉えられており、貯蓄財としての脆弱さゆえにその価値がほかの財と比べて低く評価されているといえる。ただしこのような価値観は、家畜に依存して暮らしてきた人々が酷いゾドによって家畜を奪われ、落胆している当時の心理状態を強く反映した、状況依存的なものであるだろう。

次に資本としての家畜、すなわち家畜の再生産する力に関する牧民の認識について示す。

【事例4】家畜の再生産力

【事例1】で紹介した DD, bz, 42 歳の訪問男性の会話の続き）

DD によれば、現在の DD 家の馬群は 1940 年代に 50 *to'g*. で買った 1 頭のメスウマに始まり、このメスウマのオタム (*udam*; ①血統・子孫・末裔, ②遺伝) は繁栄し、何千 *to'g*. 分にもなった。だが 1999 年から 2000 年にかけてのゾドでその大部分が失われた。しかしながら、灰色のメス、茶色のメス、白い去勢オスたちといった例のメスウマのオタムに属する個体が残った。この一部は、例のメスウマの 1 頭の子孫との交換で他人から入手した別のメスウマの子孫たちであると DD は言い添えた。

この事例では、現存する個体と過去の 1 個体との関係が、オタムという概念を使って血縁的連続性によって表現されている。しかも実際には血縁関係のない個体についてもオタムという血縁イデオロムによって例のメスウマと関連づけられている。モンゴルでは、儀礼的な交換を除くと、家畜と家畜の交換は一般に、現金による自動車購入などと区別されることはなくナイマー (*naimaa*; ①商売・貿易, ②取り引き) とよばれる。ナイマーで重視されるのは取り引きされる家畜の経済的価値であって、交換に参入する人々の社会関係ではないが、家畜と家畜のナイマーにおいては、与えた家畜と受け取った家畜がそれぞれに個性をもったものとして認知される。本例では、個体 P との交換によって入手された個体 Q が個体 P の系譜的位置に入れられ、個体 Q の子孫も個体 P のオタムに位置づけられている。DD はこのような操作によって 1940 年代に買った 1 頭のメスウマの豊穰性を表現し、この事例によって家畜の殖えるという性質を強調している。

DD はデレン郡の最年長者の 1 人として、人生のなかで誰よりも多くゾドを経験するとともに、その後に家畜群が再生する過程を何度も見てきた。今回のゾドで牧民の多くが家畜を失い、家畜という財の脆弱性を思い知らされて不安を抱えている状況において、DD は若者に対して、家畜が自然環境によるダメージを乗り越えて再生産する力をもっていることを、若干の操作を加えて強調しつつ、自分の経験に則して説いたのである。

ゾドで多くの家畜を失った牧民たちは家畜の価値をほかの財と比較して低く見積もることもあるが、彼らは生業として牧畜を続けていこうとしている。その原動力となるのは、微増減を

繰り返しながらも殖えていく家畜の再生産力を信頼し、これに賭ける気持ちであろう。家畜は財でありながらも生き物でもあり、自然に対して本来的に脆弱であると同時に、それを自ら克服する力を有している。長老 DD は家畜に対するこのような見方を経験的に身につけているのである。

4-3. 家畜に対する個体識別

市場経済化のもとで家畜は商品化されている。だが一方で、牧民たちは日々の家畜管理において家畜を数で把握しているわけではない。そして自分の家畜をほぼ個体識別している。太田は東アフリカの牧畜諸社会で人々が家畜を数えていないことを示し、家畜を「数えない」という態度は、家畜群を「無名のものの集まり」とはみなさないことの表明であると述べている[太田 2002: 27]。つまり、市場経済化後のモンゴルでは家畜が個別化されている側面もみいだせるのである。

家畜の頭数については、外部の調査者が牧民に「おたくはヒツジを何頭もっていますか」と尋ねると、答えは概数であったり、同じ世帯のメンバー間で答えが異なったり、実際に数えられた頭数と違ったりすることがある。モンゴルの牧民は家畜が多いことを豊かさの象徴と考えており、家畜の頭数を言語化するさいに多めに見積もった「500～600頭」といった概数を好んで使う。概数の言葉の響きは豊かさを体現するが、ちょうどの数字を口に出すと豊穡さが損なわれ、繁栄が阻害されるとして嫌われる。それだけでなく、多くの人々は実際にも自分の所有する家畜の頭数を正確に把握していない。ほとんどの牧民が、毎年末に行政がおこなう家畜頭数調査で数えられた自分の家畜の頭数をメモしているが、その後の消費については記憶や記録が曖昧で、現時点での頭数は正確には把握されていない。対象を限定して、「今年、何頭のメスヒツジを搾乳しているか」と尋ねても、やはり正確な頭数が得られないことが多い。ところが、調査者が群れのなかに入って任意のメスヒツジを捕まえて「これを（今年）搾乳しているか」と聞くと、DD 家の人々はヒツジの顔を見て即座に答えてくれた。「今年、搾乳しているメスヒツジはどれか」と質問しても、「これ、それ、あれ」と顔の見える限りの個体を指し示してくれた。あるカテゴリーに属する個体の「頭数」は、このようにして具体的に選び出された個体を数えていくことによって、はじめてわかるのである。

預受託される家畜の扱いをめぐるでも、家畜は数量として把握されているわけではないことがわかる。DD 家は既婚の子ら 3 人と知人 1 人の家畜を預かっているが、DD 家は預かっている家畜を勝手に処分して同じ種・性・成熟度カテゴリーに属する別の個体で代替することはできない。また預かっている家畜が野犬による捕食や病気など不可抗力で失われた場合、預託者は諦めるしかない。それは家畜が、ウシ何頭、出産ウシ何頭、仔ヒツジ何頭といったカテゴリーとして把握され預受託されているのではなく、個体識別された具体的な個々の個体として

扱われているからである。

家畜に対する個体識別にもとづく認識は、日帰り放牧における群れ管理技術にも利用されている。近接して放牧されていた2つのヒツジ・ヤギ放牧群が混ざり合ってしまった場合、牧民は自分の管理する群れの個体を個体識別しているので、これが他家の管理する何百頭もの群れのなかに紛れ込んでいたとしても「見ればわかる」のである。このため牧民は、個々の個体の顔を見ながら混ざり合った群れを元どおりに分離する。DD家のヒツジ・ヤギの群れが他の世帯の管理する群れと混ざり合ったとき、DDらは家畜の顔を見ながら自分の個体を選択して2つの群れに分離したが、群れの個体の数を数えはしなかった。

以上から家畜は個体識別されていることが示された。ところで太田は「家畜が個体識別されると、同時に母子関係が認知可能になる」[太田 1987b: 818]と述べている。そこでDD家における家畜の母子関係の認知について検討する。

【事例5】母子関係の認知の曖昧さ

筆者がDDに「メスヒツジXの当歳仔はどれか」と尋ねたところ、DDは仔ヒツジYを指した。筆者は、Xが仔ヒツジZにたびたび哺乳するのを目撃していたので、「Xの仔はZではないか」と疑義を呈すると、bzも「Xの仔はYだ」と主張した。bzが仔ヒツジを使って試せばわかるというので、筆者がbzの言うとおりにYを抱きかかえてXの傍に放した。すると、YはXには追従しなかった。これを見たDDとbzは「YはXの子ではない」と認めた上で「私たちは今年、出産期に家にいなかったので母子関係をよく知らない」と言った。DDとbzは2001年春、三男DJの病気治療に付き添って数週間首都に滞在していたのである。

この時に出産の世話をしていたのは末娘のotとその夫であった。そこで、囲いに入れられた当歳仔ヒツジ44頭と囲いの外のヒツジの群れを前にして、筆者はotに、母と仔の組み合わせを尋ねた。otは次々と母と仔を組にして指し示してくれたが、あるメスの仔について2頭の仔ヒツジのあいだで判断に迷った。otは「仔ヒツジをメスの前において試そう」と言い、1頭目の候補を囲いから取り出してメスの傍においたが追従しなかった。2頭目の候補を放すと哺乳した。otは2頭目が先のヒツジの仔であると筆者に告げた。

筆者は「当歳仔ヒツジについて一番よく知っているのは誰か」とotと夫に尋ねた。すると夫が「今年の子の出産の世話をしたのはotと自分で、われわれ2人が一番よく知っている」と答えた。そしてその証拠を示すように、仔ヒツジの入った囲いを見回して「今年最初に生まれた仔ヒツジはこれ、次はこれ、その次はあれ」と順に指した。

この例は、DD家の人々がヒツジ・ヤギの母子関係を必ずしも正確に把握していないことを

示している。出産期に不在だったメンバーは、その後の家畜管理作業のなかで母子関係のある程度は把握したものの、誤認や知らない組み合わせがあった。実際にヒツジの出産の世話をしたメンバーは母子関係のほとんどを知っており、とくに最初の頃に生まれた個体は出生の順番とともに明確に把握している。だがよく似た模様の仔ヒツジを見分けられないことがあった。

つまり家畜の母子関係については、正確に認知されているペアもあれば不確かなペアもあることがわかる。すなわち個体識別は母子関係の認知が成立する必要条件であって十分条件ではないのである。また母子関係に関する知識は世帯メンバーに均等に分布しているわけでもない。ある年の出産期に立ち会ったか否かという各人の経験により、当歳仔を含む母子関係の知識には偏りが生じているのである。

DD家のヒツジ・ヤギ群の現存する個体間の血縁関係は、せいぜい3世代であるという。だが、この群れの元となる群れを長期間世話してきたDDとbzは、過去の個体間関係を知っており、現存する個体どうしの関係も過去に遡ってつなげることができる。これに対して若いotは、現存する個体の血縁関係は知っているが、その1代前の個体間関係をほとんど知らない。そして1998年に婚入したotの夫は現存する個体についても多くを知らないという。

家畜の母子関係や出生状況の特徴は、ある個人が、実際にある個体の出産助介やその後のケアをおこなう過程で認識されるものである。そのさい、出生の順番が早いなどの特徴的なエピソードは、その個体の個性性が比較的強く印象づけられるきっかけとなる。とはいえ、出生順位に関する知識をはじめとして母子関係に関する知識全般は、仔が成長して離乳期を迎えれば、「必要がないため、忘れてしまう」という。

以上からいえるのは、まず家畜の個性性に関する知識は、ある牧民と特定の個体との相互交渉のなかで経験的に得られる個人的な知識であり、積極的に伝承され、共有される知識ではないということである¹⁹⁾。実際、DDがもっている豊かな知識の大部分はotに継承されてはいない。また、ある家畜の個性性は状況に応じて、ある時は強く立ち現れ、ある時は弱まるというように、変動するものである。牧民は、家畜に対する個体識別という認識を基盤として、男性なら放牧、女性なら搾乳といった日々の牧畜労働のなかで家畜との相互作用を積み重ね、その過程で印象的なエピソードを各個体の個体情報として加えたり、忘れたり、また別の印象的なエピソードをきっかけとして思い出したりするのだろう。

4-4. 家畜の個性性の発現

個体の個性性について考えるさい、固有名の検討は重要である[出口 1995]。筆者はDD家の人々に、【事例2】で紹介したデルベー以外に名前(ner)をもつ家畜がいるか尋ねてみた。すると「家畜は食べるために飼っている。名前をつけるなどして家畜に対して「愛着が生じる」(khairlakh)と殺せなくなる。だから名前はつけない」と説明された。筆者は、アルハン

ガイ県でウシの搾乳の時、メスや仔を呼び出すのに固有名が用いられるのを観察しており、そのことを話してみた。だが DD 家の人々は、そのような場合は必要な個体に接近して追うと述べ、種・性・成熟度カテゴリーに関わらず家畜は食べるために飼っているので名前をつけないと強調した²⁰⁾。

彼らは家畜に固有名を付与することと、家畜と人間とのあいだに人格的な関係ができることを直接に結びつけ、これらは、肉食や屠殺とは相容れないものと考えている。現代モンゴル人の食生活では、家畜を生かしたままで得られる乳よりも、屠殺しないと得られない肉に重きがおかれている²¹⁾。このような社会において固有名を付与され、食べるためという家畜の本来の目的に反して自然死させられたデルベーは、DD らによって娘 ot に贈与された時点ですでに消費されたものとみなすこともできる。

以上のように家畜に対しては、これを消費されるべき商品というカテゴリにとどまらせるため、名付けをはじめとする個性性を強化するような行為は避けられている。にもかかわらず、家畜の身体的な特徴によって個性性が発現することがある。そのプロセスを示す。

【事例 6】家畜の身体特徴と過去の記憶

DD のヤギのなかには、体毛が黒く、耳が親指の先ほどの突起状である一群の個体がいる。このような耳の特徴はホボ (*khuv*; 耳なしの・耳のきわめて小さい) とよばれ、ヤギに稀に現れる遺伝形質である。

DD によると、DD 家に現存するホボの黒ヤギは、ネグデル期にネグデルから給付された 1 頭の黒いホボの種オスヤギに由来する。DD 家は 10 数年前、長男 BJ の妻となった女性の母の世帯と一緒に生産小隊をなし、ネグデルのヒツジ・ヤギの群れを管理していた。秋、種付けのために種オスが配られたが、DD らの生産小隊に割り当てられたのは、「ドン品種」でもじゃもじゃの黒毛をもつホボの種オスだった。この種オスが群れに放たれると、ネグデルのヤギも私有ヤギも区別なく交配がなされた。このときから DD 家の私有家畜にはホボの黒ヤギの家系が続く。

この事例では、DD がホボの黒ヤギについて語るにより、その父祖にあたる種オスが DD 家にやってきたときのこと、すなわち DD がネグデル期のある時期にヒツジ・ヤギの管理を担当していたことや一緒に生産小隊をなしていた世帯のことが想起されている。もじゃもじゃの黒毛の「ドン品種」とは、国家の品種改良事業の一環として、ロシアのドン川流域の品種がカシミヤ毛の生産量の多さと環境適応性の高さを評価されて 1958 年からモンゴルの一部地域に種オスとして導入されたものである [Sundui 1976]。その一部がデレン郡に配分され、そのなかの偶然にホボの耳をもつ 1 頭が DD 家の管理していたヤギの交配用に割り当てられた

のである。その年、DD家の管理していた群れでは多くの黒毛のホボの仔ヤギが生まれた。国家の品種改良の意図に沿った遺伝形質とともに、関係のない遺伝形質が家畜の身体に刻まれたのである。そしてこれが世代を越えて継承されてきた。

体色や耳の形といった可視的な身体特徴は、ある個体が生まれてから死ぬまでの時間、その身体に刻まれたしるしとして人々にアピールする。遺伝形質であれば、さらに世代を超えて残っていく。

現存する黒いホボのヤギたちの身体は、DDにネグデル期に関する記憶を喚起する力を有するのである。

5. 考 察

5-1. 家畜の個性性が立ち現れるしくみ

モンゴルでは家畜は、ネグデル期、市場経済化期をとおして原則として商品経済の枠組みのなかで扱われてきた。にもかかわらず家畜の個性性は牧民の前に立ち現れることがある。家畜は生き物であるために個別の価値が浮上しやすく、人に対して訴える力をもつからである。親族構造における女性や売買される奴隷についても同様の力が指摘されてきた。たとえば女性については、レヴィ・ストロースは女性を、交換体系のなかで記号としての意味を負うが、その一方で個別の価値をもち、記号を生み出す生身の人間でもあると指摘している〔レヴィ・ストロース 2000〔1967〕:796〕。奴隷については、奴隷が財産であるだけでなく人間でもあるため、所有者が奴隷と密接に関わることで侮蔑とともに熱情や好意が育ってきってしまうといったパラドックスがつかまとうと指摘されている〔シーガル 1999〔1995〕:49〕。

このため、家畜の個性性が強く現れてしまうことは様々な手段により抑制されてきた。ネグデル期の共有家畜の管理方法は、家畜を種・性・成熟度別に分け、個体の時間変化を無視した固定的なカテゴリーに押し込め、数や重量として把握するものであった。家畜を、同じカテゴリーに属する他個体と交換可能なモノとして、等価性のものさしで測ることは、個性性を無視する管理理念を具現化するものである²²⁾。つまり、ネグデル期の共有家畜の管理システムは、家畜を集合あるいは類として扱うものとしてデザインされていたのである。一方で、ネグデル期・市場経済化期の双方において私有家畜の扱いをめぐることは、固有名を付与する対象を限定してその他の個体には与えないことや、特別な個性性をまもってしまった家畜を近親者に贈与することなどが行われていた²³⁾。つまり、特別な個体とそれ以外を区別することで、不特定多数の個体に対して無差別に感情移入が生じることが抑制されていた。

このように、生き物である商品が、商品にとどまらずに多義的な意味を帯びる理由は2つある。第1に、生き物は時間の経過とともにその身体が変化し、そのことによって人間との関係

が変化する。事例 1 は、ある個体が厳しいゾドを生き抜くことにより、その個体と子孫が強い血統として高い有用性を認められるのと同時に、その個体や家系がゾドの記憶の手がかりとしての特別な意味を帯びる過程を示していた。第 2 に、人間との相互交渉のなかで特定個体の性格・行動・身体の特徴が人間に強くアピールすることがある。このように、家畜に対する意味づけとその変化は、家畜の個体史および人間と家畜の交渉の積み重ねの過程で起こり、時間が重要な役割を果たしている。

そして、時間と共に変化する対象を一つの個体として捉える認識の基盤をなすのは、個体識別という認知である。個体識別がなされていて初めて、ばらばらなできごとや情報がある個体の個性としてまとまりをもって認識される。言い換えると、個体の意味の変化は、生き物に特有な時間性と偶然に関わる変化を、牧民が連続して把握しているという条件において生じる。ネグデル期の共有家畜にはこれは起こりにくかった。だが私有家畜は、ネグデル期・市場経済化期の両方において、個体の一生を越えることもある長期的な時間のなかで同じ牧民によって維持、管理され、個体の一生や家系の連続が認知されることが多かった。家畜の個性は個体史を通して牧民の前に立ち現れる。そして、牧民はこれを、名付ける／名付けない・贈与する・屠殺するといった行為によって確認したり抑制したりしてきた。

ただし究極の個性とは、コピトフや柄谷が「単独性」とよんだ、記述や指示には還元できない、何ものとも代替が不可能なかけがえのなさであるのだが、実際に家畜が個体識別されているという事実が明るみに出るのは、特殊性の積み重ねによる「家畜の個性」が指示されるときなのである。

5-2. 個性を認識することの意味

家畜の個性を認識することの意味は、第 1 に、生業としての牧畜を成り立たせるのに不可欠の技術として重要である。そして第 2 に、個人の過去の出来事に関する記憶と結びついた象徴的な意味が指摘できる。

まず技術的な意義については、家畜の各個体についての情報は、次のような具体的な家畜管理場面で実用性を発揮する。まず、個体識別に基づいて母子ペアを認知することは、家畜の乳に依存する牧畜においては生活の維持にかかわる基本的な技術のひとつであり〔太田 1987b: 818〕、母子関係の認知は搾乳や哺育の補助を行うのに必須である。さらに、「自然選択」によって生き残った生命力の強い個体や家系を選択的に残していくことは重要である。それと同時に、発育に問題があったり病気に罹ったことのある個体を常に注目しておくことで、病気や怪我を早期に発見して対処できる。行動面では、牧民は、日帰り放牧中に群れから離れやすい個体などに着目して群れをコントロールしている。また、預受託している個体やその個体から生まれた仔については、双方が自分の権利を守るためにこれを正確に把握していなければなら

ない。

ただし、生業を成り立たせるためには、必ずしもすべての個体についてすべての牧民が個性を認知しなければならないわけではない。ネグデル期には、原理として家畜の個性性を捨象した管理システムのもとで家畜はなんとか維持されていた。市場経済化期における DD 家においては、家族のなかでも家畜の個性性に関する知識の分布には偏りがあった。また、個体史や行動がよく知られている個体と、目立たず、ともすれば忘れられてしまう個体とがあり、家畜に認められる個性性には個体差があり、濃淡がみられた。

だが他方で、家畜の個性性に関する知識は、生業を維持するための技術的必要を越えることもあった。家畜が過去の記憶と結びついた象徴的な意味を担う場合である。ヒツジの「デルベ」は、大切に育てられかわいがられた挙げ句に、自然死させられるという経済合理性に反する扱いを受けた。また DD が誇るウマの家系については、その繁栄を強調するために系譜関係が認知的に操作され、優良な血統を選択的に残すという実用を越えていた。家畜は牧民にとって、商品に留まらない多義的なモノであり、とくに過去の記憶を喚起する手がかりとしての象徴的な意味は大きい²⁴⁾。

家畜の身体には過去の痕跡が刻み込まれている。身体特徴はその個体が生きている限り人々の目に晒され、死んでも遺伝して子孫に残ることがある。家畜の身体が人々に訴えかけることによって喚起される記憶がある。DD が家畜の過去について語るとき、その個体と結びついた DD の人生における過去の記憶、すなわち DD の青年期や兵役の経験、厳しかった数々のゾド、子どもたちの成長、昔の生産小隊のなかま、かつて担当していたネグデルの家畜、がつむぎ出される。DD が家畜の過去について語るとき、帰省中の BJ, TL や DJ, ot が話に修正や補足を加えることがあった。これに対して 1998 年に婿入りした ot の夫は、DD 家の「特別な」家畜についての話を、筆者と同様に初めて聞くのであった。内堀は、モノが過去の記憶と結びついた特別な意味をもつのは、往々にして、個人の記憶という私的な領域、あるいは限定された共同性のなかだけであると指摘している [内堀 1997: 15]。そもそも家畜の個性性に関する知識は経験的に獲得される個人的な知識なのである。そして、家畜の過去に関する記憶も個人的なものであったり、共有されることがあっても範囲はその家畜と時を共に過ごした家族成員などに限定されるのである。

5-3. 家畜の意味づけからみた近代の受容のしかた

社会主義はモンゴルの牧畜社会に、家畜を類として扱うことで分業を推し進めると同時に 1 つの群れに属する個体数をできるかぎり増やすことで効率を上げる「規模の経済」の論理を持ちこんだ。そして自分のものではないネグデルの共有家畜を預かる牧民に対して、労働の成果を明示し、報酬に反映させる基準として、家畜を頭数あるいは総重量という数量として扱うこ

とを課した。これがモンゴル社会主義における牧畜の近代化である。

とはいえネグデル期にも、国内家畜の約20%を、私有家畜という所有カテゴリーに属する家畜群が占めていた。私有家畜は（すべてではないかもしれないが）個体識別され、母子関係も認知され、その集積として家系の連続が認知されていた。何よりも注目すべきなのは、私有家畜の一部が個性性を強く認められ、なかには他の個体とは異なる特別な意味を与えられ、特別な扱いをされていたという事実である。

つまり、社会主義的な近代化は、必ずしも家畜に対する価値づけと意味づけの領域を、脱個別化と商品化で覆い尽くしたわけではないのである。国家のシステムが分業と大量生産をめざしていたときにも、家畜のすべてが類あるいは数量として捉えられていたわけではなく、家畜の一部にはある種の単独性が認められていた。

市場経済化後の状況はどうだろうか。1990年代前半には一時的に流通網が麻痺したが、その後、外国や国際機関からの援助もあって、家畜がある程度増えると牧民がこれを市場（あるいは巡回商人）に販売するしくみが整ってきた。そして家畜は牧民にとって、食料、交換財、生産の資本と多用途な、もっとも重要な経済手段となった。とはいえ、すべてが市場化されたわけではない。市場経済化が進められている政治経済状況のもとでもやはり家畜は、牧民が毎日これを世話するなかで相互交渉をもつ過程において、商品の枠に収まりきらない特別な関係が生じてしまうようなモノなのである。そして実際に家畜は、個人や、家族といった経験を共にしてきた人々のあいだに、過去の記憶を喚起する象徴的な存在として浮かび上がることがある。家畜がともすれば、その個性を強烈に発現して訴えかけてくる存在であることを熟知している牧民らは、家畜に対してむやみに感情移入することを自分に戒めていた。そのことは、「家畜は食べるために飼っている」という人々の主張に現れている。

社会主義による集団化も、市場経済化も、様式は異なるがともに近代化である。そこでは、家畜を商品化するしくみが経済領域の大半を占めてきた。たしかに、ネグデル期の共有家畜は全面的に商品であったし、市場経済のもとでも家畜は第1に商品である。だが、モンゴル牧民はそのようなマクロ経済システムのなかにあっても、家畜をすべて商品化したわけではない。私有家畜は、ネグデル期にも市場経済化期にも商品であるとともに、自家消費や贈与、記憶装置としての役割といった重層的な価値を担っていた。モンゴルでは、ネグデル期にも市場経済化以降にも、独特な人間＝家畜関係が維持されてきたのである。貨幣をはじめとする近代システムの受容のしかたは文化により多様であることが指摘されてきたが [Parry and Bloch 1989]、モンゴル牧民が社会主義および市場経済化という2つの近代化を受け入れてきたそのやり方は、彼らの生業の基盤である家畜の物質的な特性に強く影響された、独特なものとなっている²⁵⁾。

6. おわりに —— 国家の政治経済の変化と家畜の意味

本論は、モンゴル牧畜社会における家畜の個性性のあり方に注目し、家畜は生き物であるために完全に人間の意図や人間のつくった制度におさまりきらない特殊なモノであり、マクロな国家制度や市場の影響を受けながらも、人間とのインタラクションのなかで特別な意味を帯びてしまうことを示してきた。モンゴルの牧畜社会は、社会主義を経て市場経済化・民主化への移行の圧力を受け、歴史の波にもまれてきた。それにもかかわらず家畜の位置づけは、商品である一方で牧民の記憶のよりどころとなり、また個人や家族のアイデンティティに関わるような存在である点で、きわめて牧畜文化的な扱われ方をしている。これは、東アフリカの牧畜諸社会などの研究によって明らかにされてきた、家畜の個性性に対する精密な認識や家畜に対する自己同一化といった、プロト牧畜文化的な人間＝家畜関係に相通ずる側面である。だが一方で彼らは「家畜は食べるために飼っている」と言って自分自身をいましめ、家畜に対する感情移入が無差別におこらないように、名前をつけないなどの文化的慣行によって家畜の個性性が立ち現れることを抑制していた。そして、モンゴル牧民のこのような家畜との関わり方は、工業モデルによる分業化と大規模化を牧畜にも適用し、生産性を上げようとしたネグデル期の生産システムのなかでも、周辺的な領域で連続してきた。彼らの現在の牧畜実践は、モンゴル独特の「食べるための家畜」観にもとづく文化的特徴と、ネグデル期の工業的生産システムによる家畜の商品化、とが重層的に重なり合った連続性のうえにあるのである。なお、本論では限定された地域で収集された事例をもとに分析をおこなったが、モンゴル国内の地域バリエーションについて検討することを今後の課題としたい。

付記 本稿は、平成 15 - 18 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の研究成果の一部である。

参考文献

- Central Statistical Board under the Council of Ministers of the MPR 1981. *National Economy of the MPR for 60 years (1921-1981)*, Ulaanbaatar.
- 出口顯 1995. 『名前のアルケオロジー』東京：紀伊國屋書店。
- Deren sum 1980 年代後半. *Deren sum*. (「デレン郡」というタイトルの小冊子。書誌情報はないが、内容から、デレン郡において 1980 年代後半に発行されたことが推察される。)
- 福井勝義 1987. 「牧畜社会へのアプローチと課題」 福井勝義・谷泰編 『牧畜文化の原像』東京：日本放送出版協会, pp. 3 - 60.
- 1991. 『認識と文化』東京：東京大学出版会。
- 二本博史 1993. 「農業の基本構造と改革」 青木信治編 『変革下のモンゴル国経済』東京：アジア

経済研究所。

- Herskovits, M. L. 1926. The Cattle Complex in East Africa, *American Anthropologist* (N. S.) 28: 230–272, 361–388, 495–528, 633–664
- 稲村哲也, 古川彰, エンクチュルーン 1995. 「モンゴルにおける社会主義体制の終焉 — 経済・社会・文化の変動と環境問題」『リトルワールド研究報告』12: 28–79。
- 稲村哲也, 古川彰, 結城史隆, 渡辺道斎, O・スフバートル 2001. 「市場経済化過程におけるゴビ地方遊牧社会の現状と社会・経済変動」『リトルワールド研究報告』17: 127–139。
- 柄谷行人 2001 [1994]. 『探求Ⅱ』東京: 講談社。
- 風戸真理 2003. 「市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践 — モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より —」『モンゴル研究』21: 47–67。
- 湖中真哉 2002. 「生業牧畜と市場経済を結ぶ地域ネットワーク — ケニア中北部サンプルの家畜商の事例」佐藤俊編『遊牧民の世界』京都: 京都大学学術出版会, pp. 175–222。
- Kopytoff, Igor, 1986. “The cultural biography of things: commoditization as process.” In *The Social life of Things*. Appadurai (ed.), Cambridge: Cambridge University Press. pp. 64–91。
- ラティモア, オウエン 1966 [1962]. 『モンゴル — 遊牧民と人民委員』磯野富士子訳, 東京: 岩波書店。(Lattimore, Owen, *Nomads and Commissars—Mongolia Revisited.*, New York: Oxford University.)
- レヴィ=ストロース, クロード 2000 [1967]. 『親族の基本構造』福井和美訳, 東京: 青弓社。(Lévi-Strauss, Claude, *Les Structures Élémentaire de la Parenté*, Mouton & Co and Maison des Sciences de l'Homme.)
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所編 1988–1, 2 [1969]. 『モンゴル史1・2』田中克彦監修, 二木博史, 今泉博, 岡田和行訳, 東京: 恒文社。(BNMAU-yn ShUA-iin Tu'ukhen Khu'reelen, *Bu'gd Nairamdal Mongol Ard Ulsyn tu'ukh. Gutgaar bot', nen shine ue.*)
- National Statistical Office of Mongolia 1998. *Mongolian Statistical Yearbook 1997*, Ulaanbaatar.
- 太田至 1987a. 「トゥルカナ族の家畜分類とそれにとまなうハズバンドリーの諸相」和田正平編『アフリカ — 民族学的研究 —』京都: 同朋舎, pp. 731–769。
- 1987b. 「家畜の「個性性」の認知, およびその意味についての試論」和田正平編『アフリカ — 民族学的研究 —』京都: 同朋舎, pp. 817–827。
- 1998. 「アフリカの牧畜民社会における開発援助と社会変容」高村泰雄・重田真義編『アフリカ農業の諸問題』京都: 京都大学学術出版会, pp. 287–318。
- 2002. 「家畜と貨幣 — 牧畜民トゥルカナ社会における家畜交換」佐藤俊編, 前掲書, pp. 223–266。
- 小沢重男 1983. 『現代モンゴル語辞典』(第1版), 東京: 大学書林。
- Parry Jonathan and Bloch Maurice 1989. Introduction: Money and the morality of exchange. In Jonathan Parry and Maurice Bloch (eds.), *Money and the Morality of Exchange*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1–32.
- シーガル, ロナルド 1999 [1995]. 『ブラック・ディアスポラ』富田虎男鑑訳: 明石書店。(Segal, Ronald, *The Black Diaspora: Five centuries of the Black Experience Outside Africa*, New York: Farrar, Straus and Giroux.)

- 坂本是忠 1969. 『モンゴルの政治と経済』千葉：アジア経済研究所。
- 佐藤俊 1991. 「ラクダ移譲の制度的側面－ケニア北部のレンディーレ社会の事例」田中二郎，掛谷誠編『ヒトの自然誌』東京：平凡社，pp. 271－292。
- Sundui, E. 1976. *Manai Ulsyn Malyn U'uldriin O'ngot Zurgiin Al'bom*, Ulaanbaatar, Ulsyn Khevrelelin Gazar.
- Sneath, David 2002. Mongolia in the 'Age of the Market': Pastoral Land-use and the Development Discourse, In Ruth Mandel and Caroline Humphrey (eds.), *Markets and Moralities, Ethnographies of Postsocialism*, Berg, Oxford and New York, pp. 191－210.
- 内堀基光 1997. 「ものと人から成る世界」内堀基光編『「もの」の人間世界』岩波書店，pp. 1－22。
- 梅棹忠夫 1990. 「モンゴルの家畜名称体系」『梅棹忠夫著作集，第2巻』中央公論社。
- 吉田順一 1980. 「モンゴル遊牧の根底」『モンゴル研究』11：39－49。

注

- 1) モンゴルは，1921年の人民革命の後，「モンゴル人民共和国」として社会主義建設の道を行ってきたが，1989年末からの民主化運動の結果，1992年に民主国家「モンゴル国」へと変わったという歴史をもつ。
- 2) 出口顯は，固有名に関する議論のなかで，柄谷による単独性と普遍性に関する議論を批判的に継承した。
- 3) 「商品」(commodity) とは，使用価値をもつと同時に，ある独立した取り引きのなかで他のモノと交換されるモノである [Kopytoff 1986：68]。
- 4) コピトフは奴隷の人生を事例として，一度は商品化されたモノにも時間の経過に伴って再び単独化される可能性が開かれていることを具体的に示し，モノが時間の経過の中で商品化 (commoditize) されたり単独化 (singularize) されたり，また以前の相へと戻ったりする過程について論じている [Kopytoff 1986：76]。
- 5) ゾドの原因には，積雪・降雪の過多と過少，酷寒，猛吹雪，牧地のアイスバーン化などがある [吉田 1980：41]。
- 6) 本論ではモンゴル語の和訳は原則として小沢 [1983] に依拠する。
- 7) 内訳は，砂漠性草原地域ではウシ 15 頭（そのうち雌ウシは 5 頭まで），ウマ 15 頭，ラクダ 20 頭，ヒツジ・ヤギは合わせて 100 頭まで，森林性草原地域では，ウシ 15 頭（そのうち雌ウシは 5 頭まで），ウマ 10 頭，ラクダ 5 頭，ヒツジ・ヤギは合わせて 70 頭まで，とされた [モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 [1969]－2：289]。
- 8) 国家政策として，1987年に生産請負制が，1989年に賃貸制が導入された。両制度の詳細については二木 [1993：119－120] 参照。デレン郡で導入された新制度は生産請負制と考えられる。
- 9) デレン郡は 4 つの行政区に分かれるが，後述する DD 家が所属する第 2 行政区には，117 世帯が属していた (2000 年 12 月末現在。デレン郡役場作成の統計による)。2001 年 8～9 月に，そのうちの 74 世帯の居住集団の構成状況を調べたところ，1～3 世帯からなる 61 の居住集団に分かれ，全体の 82% (50) が 1 世帯だけからなっていた。
- 10) 人名は仮名とし，男性は大文字 2 字，女性は小文字で，年齢は 2001 年現在の満年齢を表した。

商品世界からこぼれ出る家畜（風戸）

- 11) Ot 夫婦は珍しく、夫の実家が貧しかったこともあり、結婚後 3 年間も妻方両親と同居してきた。
- 12) ネグデル期以前には、市場経済化期と同じように、各世帯が複数種類の家畜を所有して、1カ所のキャンプで管理していた。
- 13) 老いて妊娠しなくなったメスは、不妊群に移されて首都への出荷のために肥育されるか、郡内で消費された。
- 14) ヒツジ・ヤギの消費年齢は、1980 年代初頭までは約 40 ～ 50 カ月齢であったが、1980 年代後半には柔らかい肉が要求されるようになり、約 20 カ月齢で出荷された。
- 15) 種オスは、自分の仔が成長するとこれを群れから追い出し、他の種オスの群れに吸収された。
- 16) 稲村らは、フブスグル県の牧民による次のような証言を報告している。「5 年間ネグデルの家畜を死なさなければ、チャンピオンとして表象され、ゲルがもらえた。そのため、(ネグデルの) 家畜が死ぬと自分の家畜で穴埋めしなければならなかった」[稲村ほか 1995: 44]。
- 17) 弱い家畜に対する保護としては、仔畜に対する哺乳介助のほか、春先に疲弊した個体に手作りの栄養補助食（乳清や、秋の馬糞にニラ科植物（*taana*）の汁または濃厚飼料を混ぜたもの）を与えることがある。
- 18) ネグデルの民営化については別稿 [風戸 2003] を参照。
- 19) 優秀な競走馬については、行政区・郡・県・国などの地域集団において情報が共有されることがある。
- 20) DD 家ではゾドでウシが激減し、調査時点では搾乳していなかったため、実際の作業は観察していない。
- 21) 食肉用としてもっとも重要なヒツジ・ヤギは一般に、生後 7 ～ 8 年で屠殺される。
- 22) 奴隷の取り引きにおいては、労働力によって付与された単位量が使われており、人間である奴隷をこのような「売買単位」によって扱うこと自体が奴隷貿易の原理をなしていたとされる [シーガル 1999 [1995]: 48 - 50]。
- 23) モンゴルでは特定の家畜個体を儀礼的に聖別し自然死させることがある。その場合、宗教的な布や護符といった可視的なしるしを当該個体の首につける。これは、単独性を特定個体に限定する効果があると考えられる。
- 24) 内堀基光も、モノが過去の出来事の特権的な記号となること、そしてモノの意味はそれに関わるモノの人生のなかで生じた出来事の記憶と結びついて重層性を帯びることを指摘している [内堀 1997: 15]。
- 25) 湖中真哉も、市場経済化のなかでケニアの牧畜民サンプルが牧畜民らしい家畜観を維持しつつも市場経済に対応している事例を示している [湖中 2002]。